いのちの森植樹祭 in おたる奥沢水源地 Vol 10　報告書

今年も 9 月 18 日日曜日に「いのちの森植樹祭 in おたる奥沢水源地」が開催された。
新型コロナウイルスの感染に負けないで実施する意義は地球の温暖化が待ったなしで
進行しているからである。
又「地球の命を救うために、ほんもの森をつくろう」と故宮脇昭先生の植樹にかけた情熱と志を引き継でいかなければならないからだ。故人となられた宮脇昭先生は空の上から叱咤激励し、私たちを見守っていられるに違いない。

宮脇先生は 2021 年1月に 93 才の誕生日を祝い 7 月 16 日に逝去された。偉大な先生の功績の一つは 21 世紀の人類の進むべき道を拓いたことだった。

38 年ぶりに日本を訪れたフランシスコローマ法王 21 世紀の人類の課題を三つメッセージとして残していった。そこには宮脇昭先生の偉業に通じるものがある。

ローマ法王のメッセージは

① 核兵器を廃絶し戦争のない平和な世界を創ること
② 経済格差をなくして貧困の家庭を救うこと
③ 地球の温暖化を防ぎ地球の命を守ること

である。第一のメッセージの平和な世界の創造を考えるとロシアのトルストイの言葉が浮かんでくる。それは「他人の不幸の上に自分の幸せを築いてはならない」と言う言葉である。
ロシアのプーチン大統領の失策は戦争でウクライナの国民を不幸に陥れたことである。更に大統領の大きな過ちは時代を逆行させたことである。20 世紀が戦争の時代であったとしたら 21 世紀は平和な時代を創り上げなければならないからである。

第二は経済格差による貧困の問題である。この課題については二宮尊徳の言葉が生きてくる。それは「みんなが幸せにならないと自分の幸せはない」という思想である。この影響を受けた松下幸之助や豊田佐吉などの事業家は世の中を豊かにして幸せにすると社訓に載せて実現していった。元経団連会長の土光敏夫にいたっては「個は質素に、社会は豊かに」という信念を貫き良き人材を育てる教育に私財を投資していった。

第三の地球の温暖化に対しては宮脇昭先生の【地球の命を救うため本物の森を造ろう】と生涯をかけて偉業が輝いてくる。今や地球はひとつの世界である。コロナの感染で分かるように政治も経済も教育も人類と言う視点で考えていかなければならない。その提唱者で実践者が宮脇昭先生なのだ。先生は国境と言葉の壁を乗り越えて「地球のいのちを救うため本物の森づくりに」に命をかけたのである。先生は世界 19 か国に環境保全林を宮脇メソードで開拓していき未来の明るい世界を創る先駆者になっていったのである。

今年の植樹祭は宮脇昭先生の志を引き継ぎ、一本一本の苗木に心を込めて植えて頂きたいと藤原一繪先生から指導頂きました。

＝9 月 16 日（金曜日）設営準備①＝

一年ぶりのおたる奥沢水源地である。緑の木々が葉をいっぱい広げて迎えてくれる。今年の植樹マウンドが完成している。植斜の場所が斜面でない平地なので作業がしやすいようだ。

午前 10 時植樹祭の準備に千年の森の会員と共催を頂いた小樽青年会議所のメンバーが集合する。東京からは幡野さんの姿が見える。今年は東京からメンバー5 人が3年ぶりに参加してくれると言う。これまでコロナで参加できなかっただけに再会に嬉しさがこみ上げる。

札幌の長塚さんは息子さんと娘さんを連れての参加である。素敵な親子だ。小樽教育委員会学校部長の山岸さんが常連のようにいつもして下さる。の打ち合わせは中村理事長の挨拶から始まった。理事長は今、千年の森物語を作っている話をする。ストーリーは明日の前夜祭に披露するという。中村理事長の笑顔から楽しい物語が生まれそうだ。

荒木副理事長が作業の段取りの説明をする。参加しているメンバーはベテランが多く心得た表情でうなずいている。さっそく作業が始まる。それぞれに仕事が分かっていて散っていく。中村理事長と政寿司の竹田さんと元手宮小学校校長だった荻山先生はいつもの通り通路になる道路の草刈り作

業である。三台の草刈り機が軽快な音を立てて作業が始まった。
　自然発生的にリーダーが決まりマウンドの幅の長さを計り、さっそくマウンドに必要な縄づくりが始まる。きびきびと働く女性が目につく。蘭越の渡辺さんだった。ご主人は札幌で仕事があって奥さんだけの参加だった。
　朝の内小さな小さな雨粒が空から落ちていたが作業が始まると曇り空が広がって、暑くもなく絶好の作業日和となった。
　マウンドには立て札が立てられて班ごとに区切られていく。植樹用のシャベルやスコップが設置され、水槽に水道局からに水が注がれて作業は順調に進んでいく。今年も島牧と蘭越からポット苗が届くと言う。島牧に杉山さんと蘭越の渡辺さんに感謝だ。そして小樽自然の村でもボランティアで苗木を育ててくれていて770本の苗木が搬入された。植樹祭の運営企画は市川専務理事が全てを把握しているのでスムースに進んでいくのだろう。

　島牧からの苗木を積んだトラック無事到着した。午前中の作業が無駄なく進みお弁当が届いたので昼食となる。
　緑に囲まれた水源地での昼食は贅沢なひとときだ。植樹の仲間みんなで一緒に身体を動かし一緒にお弁当を食べるこの瞬間は至福の時間だと思う。
　故人となられた宮脇先生は世界の国 19 か国で植樹の指導をなされてきたようだ。先生は外国の人たちと何度も何度もこのような満ち足りた気持ちで昼食を共にしてきたのだろう。
また言葉が通じないこともあったでしょう。しかし、一つの目標に向かって共に木を植えたことで心のつながりが生まれ仲良くなっていったのだろう。
　午後からの作業は苗木に種分けと配置の作業だ。木の種類と本数を間違いないように計画表の紙を見ながら井形さんの奥さんが指示していく。種別された苗木が次々マウンドに運ばれていく。
　次の仕事は牧草ロールの解体と分配だ。牧草が隙間なくロール化されている。牧草ロールの解体は若い力のある若者の出番だ。解体作業は牧草ロールと格闘しているように見える
ブルーシートに解体された牧草が積み込まれマウンドに運ばれていく。
　今日は三十人ほどの参加者である。見事な連係プレーで作業が進められて準備万端整って一日目の作業が終了する。明日は藤原一繪先生にきていただき最終点検、指導頂く事になっている。

　〓9 月 17 日（土曜日）設営準備②〓
　午前10時 25 名ほどの集まってのミーティングとなる。今日はマ東京から大久保さん達が応援に駆けつけてくれた。事務局の前田さんの司会で朝ミーティングが始まる。
山川副理事長が、「絶好の作業日和になりました。昨日の作業に続いて準備万端整いましょう。

宜しくお願い致します」と挨拶の後、荒木副理事長から作業の内容が話された。

①マウンドの杭に縄を縛る　②旗やのぼりを立てる　③トイレの設置

④牧草のマウンドまでに移動　　⑤マウンドの土をレイキでならす。

⑥　昨年、一昨年のマウンドの雑草刈り

とみんな慣れた仕事なのですぐに作業に入る。今日は東京から更に安西さんと浦田さん二人加わり五人となる。東京からのメンバーは各地での植樹祭に参加し、手順など把握しているので強力な戦力なのだ。天気な曇り空で雲の間から日が差し込む。少し蒸し暑さを感じるだけに作業をしていると汗ばんでくる。

今日の昼食に政寿司さんから本マグロが提供される。マグロの解体名手の竹田さんがお刺身にして持って来る。これがまた作業に参加した会員の楽しみなのだ。

午前中の作業は順調に進んでいく。植樹する場所までの通路に千年の森ののぼりが立てられて参加者を誘導するのだ。

1 班から 7 班までのマウンドには植樹に必要な道具が並べられ、準備万端である。昨年までの植樹地で雑草取りが始まる。気温が上昇して土の熱とで雑草取りも大変だ。ただひたすら黙々と雑草を抜く。植樹された木々の苗が成長して光合成が始めるまでは雑草に養分を盗られてならない。抜いた雑草も分解されて植樹された木々の養分になっていく。

お昼になった。今日はお弁当の他にマグロのご馳走だ。スーパーでは食べられない中トロの極上の刺身に舌鼓を打つ。みんな笑顔で昼食を終える。

藤原先生が到着られる。さっそく荒木副理事長の案内でマウンドの点検だ。植樹の準備は万端整っていて申し分ないようだ。ただ一つマウンドの土の栄養が不足されていることを指摘される。土に栄養がないと成長が遅れる。しかし、魚粉を使っての肥料造りとなると又、経費などの問題もある、今後の課題として考えていかなければならない。

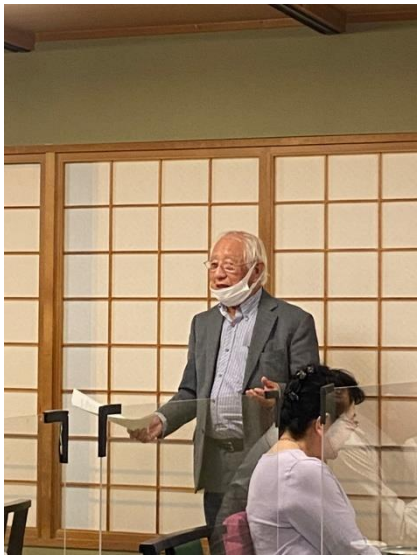
＝17 日（土曜日）　藤原一繪先生を囲んで意見交換会＝

明日の植樹祭の成功を祈願して行われる前夜祭は今年もコロナの感染予防した中での開催だった。中村衆議院議員と迫小樽市長が多忙な中を出席してくださり有難かった。

今年の前夜祭は中村理事長の千年の森プロジェクトの歴史を物語にしての語りがあって意見交換会を盛り上げた。中村理事長は16年の歴史を持つ北海道千年の森の活動を物語にしてこそ多くの人に理解されると信じてのプロジェクターを利用しての発表だった。

物語の内容は故宮脇昭先生との出会いから第一回目の植樹祭を開催し、ただひたすら木を植えてきた歴史の中に地球の命を守り続けてきた意義を見出していた。

物語には主人公が必要だ。そして悪役がいて、脇役がい



て物語がドラマチックに展開される。更に理事長は人間脳の働きにも触れて、ウクライナの戦争やコロナの感染、経済格差の問題と閉塞的になりがちな人間の脳が新たなマイナス思考を呼び日常の生活が不幸になっていくことを憂いて、それを乗り切る活動が森づくりにあることを強調した物語だった。

確かに木を一本一本植えることで森が生まれていく。森は木材の生産のほかに酸素をつくり、水を豊かにし、山崩れを防ぎ、多様な生き物の生息地となり、地球環境を整える働きしている。一本の木を植える活動は脳をプラス思考に変えていくのだ。

地球の温暖化が進行し地球命に危機が訪れている現代において、地球の星に住む人間が一人 3 本の木を植えることでも地球の命を保護される。

理事長の物語を聞きながら、北海道千年の森プロジェクトが 15 年間続けてきたからこそ植樹の意義が輝いてくるのだと思うのだった。

意見交換会は中村理事長物語で一気に盛り上がり、市川専務理事から各班の発表と各リーダーの紹介、そして各リーダーの決意表明は例年になく高度な内容となっていた。藤原先生をお迎えしての意見交換会は藤原先生のお話を聞いて、この町小樽から世界へと発信する開設からの思いを改めて強く感じる意見交換会となりました。

〓9 月 18 日（日曜日）植樹祭〓

植樹祭の朝は空が曇り空だった。今日は午後から雨の予報だ。しかし、これまでの植樹祭が好天に恵まれてきただけに大丈夫だろうという気持ちになる。

午前8時過ぎるとリーダー研修に参加する会員が次〃と現れる。藤原先生の指導を受けるのだ。雨がぽつりぽつりと降ってくる中、今年の植樹祭の案内状に「小雨決行」となっていることから多少の雨には負けられないとそんな思いが浮かぶ。

1班から 7 班のリーダーが勢ぞろいする。中村理事長の挨拶の後、直ちにリーダー研修が始まる。今年もミズナラを中心にイタヤカイデ、ナナカマドなど 6 種類の木を植える。藤原先生は植

樹する木の名前を教えながら今年植える６種類の木の特色を話してくれる。広葉樹は光合成が盛んに行われるだけに種類が多い。

リーダーの中にはベテランが多い。しかし、新人もいることから、宮脇方式の特色を踏まえながらの指導となる。苗木は固い地盤では生育が遅れる。樹木の根が地中深く張って、通気性、透水性の良い土ほど苗木が伸びる。それだけにまず土づくりが重要になってくる。もうすでに苗木が伸びやすいマウンドが出来上がっている。

植樹作業の最初はトレーに入っている苗木を二人リーダーになって水槽に浸す。空気を追い出して水を吸収させるのだ。これはすぐに要領を覚えたようだ。苗木は手渡しで植える位置を決める。同じ種類の木を並べない。シャベルの長さを使って植樹の間を決める。三角形になるように配置される。リーダーは苗木の配置を見極める。

宮脇方式の特色は密植混色だ。お互いの良さを発揮しながら我慢比べで木が成長する。
自然の仕組みは神秘的だ。古来からの森林の生育を取り入れた宮脇方式はリーダーに引き継がれ植樹に参加する人たちの手でほんもの森が生まれていくのだ。

植えた苗木に牧草ワラでマルチングする。雑草防止と冬になっての地温の保持と雨水による浸食を防ぐためだ。牧草の上は縄で固定する。いずれこれらは土壌の中分解して決してゴミになることはない。リーダー研修はマウンドに縄を張り詰めて無事終わる

ニ植樹祭　開会式ニ

受付の9時半、開会式に参加する、植樹の市民がやってくる。雨を覚悟の服装だ。2007 年に誕生した北海道千年の森プロジエクトの 16 年目を迎えての小雨の中での開会式が近づく。来賓が会場前に並んで座り、定刻に司会の事務局伊藤さんの明るい元気な声で開会を告げる。

小雨の中での開会式となった。「今日は良い天気に恵まれて」のユーモア溢れる司会の言葉に思わず笑い声が起きる。中村理事長の挨拶は【愛を込めて木を植えましょう！　心に木を植えましょう】と木を植えることで心にも愛の木が育ち生きる喜びが未来を明るくしていくと笑顔で語る。来賓に小樽市議会の鈴木よしあき市議会議長が今年も参加してくださっている。若きエネルギーで植樹活動の中核として共催頂いている小樽青年会議所吉田理事長と、更に助成金を含め、植樹に参加いただいている小樽ロータリークラブ遠藤会長と小樽ライオンズクラブの会長が植樹祭を支えての出席だ。来賓を代表しての小山副市長の挨拶はこれまでの北海道千年の森プロジエクトの活動を高く評価しての挨拶だった。

小雨が降る中での藤原先生の植樹指導は凛とした声で小雨に負けない姿勢が印象的だった。開会式で各班のリーダーが紹介された。今年は三人態勢で指導に当たる。

中村理事長のユーモアあふれる手話による『ふるさと』の歌に合わせた全員そろっての手話の動作は開会式に欠かせない演出になっている。浜田カメラの浜田さんが記録係で全員そろっての写真を写す。千年の森――――の合図で！みんな笑顔で写る。

小雨の中での開会式が終わって各班がリーダーに導かれて参加者がマウンドに向かう。雨合羽に身を包み小雨決行の意気込みが感じられる。小雨の中に北ガスや中央バスのユニホームが目につく。会員企業の協力が有難い。

例年参加する職場の団体は経験を生かして順調に植樹を進めていく。空にはドローンが植樹風景を記録している。この動画はホームページなどで報告されるものとなるのが楽しみである。

各班とも苗木が植えられ、牧草が敷かれ、縄でしっかり押さえられて水が掛けられて植樹が終了する。浜田カメラマンガ各班ごとのグループ集合写真を撮る。記念看板に植樹した名前が書かれて全て完了となる。ミズナラを始め6種類潜在潜在広葉樹が植えられ今年の小雨の中での植樹祭は新たな歴史を創り、終了していく。

植樹を終えた参加者には美味しい豚汁と特大におにぎりが待っている。例年なら秋空の下で円台を囲んでの食事会になるのだが、今日は豚汁を立ったまま食べている人が多い。
豚汁が美味しくてお代わりをする人も現れる。ボランテアの仕事を終えた後の食事は格別に美味しいようだ。

植樹祭に 132 名の参加者があって、1,701 本の苗木が植えられて、16 年の北海道千年の森プロジエクトの参加者は延べ 7,811 人で植樹数は 5 万本を超え、50,101 本となった。
故宮脇昭先生がきっと空の上から笑顔で温かく見守ってくれている事だろう。

“北海道”千年の森プロジエクトの小雨の中での植樹祭は参加いただいた会員の皆さんと小樽青年会議所始め多くのボランティアスタッフのお陰で16年目,22回目の植樹祭を終えました。

記:副理事長　山 川　隆